

江戸戯作者の抵抗文学と志を継ぐもの

七松奈津夫

ノンフィクション冬の時代といわれて久しい。バブル景気終息後の1990年代後半以降、急速な雑誌売上減少が、出版業界全体の落ち込みにつながった。潤沢な取材費を投じた海外リポートなど多くの雑誌連載は打ち切られ、活動の場を失ったノンフィクションライターは、生計を立てる別の手段を見なければならなかった。大手メディアの社員記者なら未だしも、長期間に亘り丹念な取材を続けることは、もはやフリーランスには困難になっている。

かつて仕事を干されても、己の信念を貫いた物書きがいた。骨太の芸能ジャーナリストとして、著名人たちのスキャンダルをも人間くさい魅力として描き、社会の権威を嘲笑い、破天荒な生き方を貫いたルポライター・竹中^{たけなか}労^{ろう}である。『完本 美空ひばり』『鞍馬天狗のおじさんは 聞書アラカン一代』（いずれも筑摩書房・ちくま文庫）では、取材対象への底知れぬ愛情と、その恥部も含め手加減することなく人物像へ肉薄する筆致は鬼気迫るものがある。

現在古書でしか読めない『エライ人を斬る』（三一書房）は、『週刊読売』の連載記事を中心にまとめたものだが、時の首相だった佐藤栄作の妻・寛子を「庶民」ぶるネコなど声の権勢欲夫人」と揶揄。この一件で連載が打ち切りになるのだが、竹中は寛子夫人と出版元の読売新聞社社長である務台^{むたい}光雄^{みつお}を訴え、その顛末も記したいわくつきの本だ。その記事もおもしろいのだが、文壇の大御所だった松本清張の取材先での行状を暴いた記事も凄まじい。以下、冒頭を引用する。

キューバ筆禍事件 松本清張を斬る！

オレはいま、大手各出版社の週・月刊雑誌から、シメ出しの悲哀を味わっておる。その理由というのは、大作家松本清張氏にタテをついたからだ。『話の特集』に目下連載中のルポ『メモ・キューバ』の文中で、清張氏のキューバにおける行動を指弾したのがコトのおこりであった。

本年一月、オレは同国を訪問し、たまたま「ハバナ文化会議」の日本代表として招かれとった清張氏に、かの地でお目にブラ下ったのだが、カレの尊大なるふるまいことごと

とくアタマにきたのであった。およそ、権威ツラするものに対して、見さかいもなくカミつく狂疾を有するオレにとって、松本清張先生のかの地における態度でえものは、生来の権門アレルギーを触発するには存分だった。(後略)

『エライ人を斬る』(1971年、三三書房)

この『エライ人を斬る』の序で、竹中は自らを江戸時代の戯作者に擬え、死を賭してお上(徳川幕府)に逆らった創作活動をストリート・ジャーナリズムと呼び、その衣鉢を継ぐ覚悟を高らかに宣言する。権力と対峙するとき、憚ることなく、活字の暴力、ペンのテロリズムを標榜、実践する。

竹中のいう死を賭した江戸の戯作者とは、柳亭種彦と恋川春町のことだ。再び同書から引用する。

(前略) わが国では江戸の文化文政、「黄表紙」「かわら版」「滑稽本」のたぐいに、戯作者と称する市井のジャーナリストが縦横無尽の筆をふるった。平賀源内、山東京伝、式亭三馬等々、江戸のマスコミは諷刺とエロチシズムを武器として、反武家階級の文闘をこころみたのである……。

天保十三年七月、『修紫田舎源氏』(将軍家斉の淫行を諷刺した) 版本没収の上、作者柳亭種彦自決。寛文元年七月、『鸚鵡返文武二道』(幕府の文武奨励策をやユした) 禁書となり、作者恋川春町は奉行所の出頭を拒否して、みずから居室を釘づけにし、七日七晩飲まず食わず、ミイラとなって餓死して果てた。まさに壮絶な、非転向の精神を、江戸の戯作者は、玉のごとく抱いていたのである。(後略)

柳亭種彦は、天保13年(1842年)、時の老中・水野忠邦による天保の改革で、シリズ152冊を刊行し江戸時代最大のベストセラーとなった『修紫田舎源氏』を発禁処分とされ、断筆を命じられた。平安時代の『源氏物語』を下敷きに、室町時代の話に置き換え、徳川11代将軍・家斉と大奥の内情を描いた疑いが絶版理由といわれ、取り調べで拷問を受け、それが原因で病死したとも失意で自死したとも伝えられる。だが竹中は、自決と断言する。

天保の改革を遡る寛政の改革(1787年)によって、『鸚鵡返文武二道』を絶版にされたのが恋川春町だ。子供が読む絵入りの草双紙を、大人が楽しめる娯楽読み物に昇華させた「黄表紙」の祖である春町。寛政の改革を主導した老中・松平定信が推し進める文武両道奨励策が、逆効果で人心の墮落を招くもとなったと皮肉り茶化した黄表紙『鸚鵡返

『』は、当然幕府に目をつけられ呼び出されるが、居宅に閉じこもり死に至った。そして竹中は「七日七晩飲まず食わず、ミイラとなって餓死して果てた」と、こちらも明言する。ちなみに現在放送中（2025年3月）のNHK大河ドラマ『べらぼう』葛重栄華乃夢嘶』には、版元の葛屋重三郎をはじめ、恋川春町ら江戸文化を担った戯作者や浮世絵師が勢揃いする。大河ドラマといえば、戦国か幕末を舞台にすることが多く、江戸時代でも徳川家の政権樹立か、赤穂浪士が登場する元禄、八代將軍・吉宗の治世あたりが相場で、江戸中期から後期にかけた華やかな風俗を背景にするのは初めての試み。この時代の町人文化が、現代へつながるエンターテインメントの萌芽と捉えた制作者の意気込みが伝わる。柳亭種彦と恋川春町の死の理由は、実のところはつきりしていない。明治、大正、昭和と生涯をかけて権力を批判し続けた反骨のジャーナリスト・宮武外骨が著わした『筆禍史』は、古い文献を紐解きながら、主に徳川幕府が発禁処分にした書籍と絵画（浮世絵）を紹介。自らも明治新政府の弾圧を受け獄に入った外骨は、筆禍事件史ともいうべきこの著書を、「禁止図書外題」「幕府圧制実記」「抹殺文書年表」と銘打つ。柳亭種彦と恋川春町二人のことは以下のように記す。

修紫田舎源氏と水揚帳（天保十三年）

柳亭種彦著なり、『戯曲小説通志』に曰く

田舎源氏は頗る傑作として當時に持囃されたり、此書たるや、源氏物語を根據として時代を近古に取り、文詞の優麗、語句の精妙は云ふに及ばず、數十婦女の容貌氣質を寫出して、各種各様、姿を換へ態を異にし、筆々變轉、絶えて類似の痕跡だに露はさるが如き、實に草雙紙中の霸王たり（中略）然れども組頭の辨疏頗る理ありしかば、事漸く解くることを得たり、此より種彦禍の其身に及ばんことを憂ひ、恐懼の餘りに病を發し、同年七月十八日を以て歿す、享年六十歳

又『史海』には、柳亭種彦が其著『水揚帳』といへる春畫本のために、糺問を受けんとせし事ありし旨を記せり、又種彦は病死に非ずして自殺なりとの説あり（後略）

そして骸骨は、春町については次のように書く。

鸚鵡返文武二道（寛政元年）

戀川春町の著にして、畫は北尾政美の筆なり、此黄表紙も亦前に同じく絶版となる、『青本年表』寛政元年の項に曰く

鸚鵡返文武二道は、前年喜三二の出せる文武二道萬石通の後編に擬しての作なれば、

所謂文武のお世話を主題とし、以て怯弱遊惰の武士を微塵に罵倒せし痛快の諷刺作なれば、洛陽の紙價しかを動せし賣行にて、好評噴々たりしも亦主家（松平丹後守）の壓迫あっぱくに遭うのみならず、一身の進退に關係を及ぼさむ勢なりしに、今秋七月を以て不歸の客となりし云々

竹中も資料を渉獵しているだろうが、時の権力に抗う戯作者たちの心意気を思うとき、自らの死を持つて最期を迎えたはずだと確信したのかもしれない。

一発必中ならぬゝ一発筆誅ゝの論客として無頼な生き方をした竹中にあこがれ、雑誌メディアの世界に入り、反体制のアウトサイダーを気取ったものの、現実には世間の通念に逆らえず、馴れ合い妥協することの連続だった。社会の底辺で生きてきたという自負心があるが知れている生活の安定を得るうちに萎え、いつのまにか權威におもねり、組織の事なかれ主義に流されてきた。その怠惰な気持ちをもう一度奮い立たせ、理不尽なことに立ち向かう力を与えてくれたのが、竹中労らゝストリート・ジャーナリストゝのノンフィクションだった。権力に齒向かう誇り高きゝ現代の戯作ゝが、身動きの取れない閉塞感を打ち破ってくれる。